

## ヨーロッパ博物館視察記 IX

## Surgery Reports of the Museums in Europe IX

間 多 善 行  
Yoshiyuki MADA

ブリュッセル

8月19日、パリ着3日目は予定に従ってブリュッセルに行くことになっている。11時40分北駅発、TEE、アムステルダム行に乗る。コンパートメントになっているところが日本と違うが後は別段日本と違うところはない。もう一つ違うところは駅に改札口が一切ないことである。何だか頼りない気がするが、考えて見ると長距離であれば中で検札に来るのだから問題はないし、ひどく自由な気がする。もっとも朝晩のラッシュのときはどうするかその点の疑問が残ったけれど。乗心地は先日カレーからパリまで乗ったときと変わらない。あのときは普通の椅子席であったのがこちらはコンパートであることの違いだけである。やがて12時になったので食堂車へ行ったが、日本の新幹線のビュッフェよりもっと簡素で、カウンターのガラスケースにパンやちょっとしたハムやソーセージとソフトドリンクを並べてあるだけで、バーテンが一人いるだけ。大きな眼をギョロッと明けてニコリともしないで何だ、という顔をしている。色も愛想もないとはこのことである。片言の英語と身振りを交えて、このケースにあるもの以外に何かないのか、というと肩をすくめて両手を上げて見せた。仕方がないので、パンの間にハムを挟んだサンドウィッチを作ってもらい、カフェ・オレの瓶入を一本買ってテーブルへ戻り、今度の旅行始まって以来の簡素な昼食をすませた。席へ戻ってくつろいでいると国境通過の査証と税関検査に廻って来た。これも別段変わったことはない。かくして、定刻14時5分、ブリュッセル駅に到着。連れの友人が手配してあった案内の人が駅までクルマで迎えに来てくれたが、日曜だというのでホテルまで運んで帰ってしまった。まだ時間があるので、ホテルへ荷物を置いて出かけることにした。タクシーで王宮迄行き、王宮を一わたり観たが、ロンドンのバッキンガムを二まわり位小さくした感じである。地図によるとこの近くに中世博物館(Musee d' Art Ancien)というのがある。とりあえず地図を頼りに歩いてそこへ入る。

## 19. 美術史博物館(Musee d' Art Ancien)

案内図には中世博物館とあるが、内容はルネッサン

スから近世まで、さらに、展示室を改造して近代絵画までも飾っているのだから、Ancienに拘わって中世と訳す必要はないように思う。私は内容と位置とから考えて、表記のように訳した方がピッタリするように思うが識者の意見を承りたい。さて、展示品だが、土地柄だけあってフランドルのものは揃っているようだ。殊にフランドル出身でヨーロッパ各地の宮廷画家として活躍したのはルーベンスであろう。この美術館には勿論のこと、私が見ただけでもウィーンのアート史博物館、マドリードのプラド美術館、ロンドンのテート美術館、ルーブル博物館等にそれぞれ3米、4米の大作が数点ずつあったことを記憶している。特にウィーンには10点以上、2室に亘って占領していたことが印象に残っている。さて、この美術館であるが、美術史博物館として相当な規模のコレクションと建物を備えているが、何分にもルーブルを観た後だけに、すべてのものが貧弱に見えて仕方がない。正直のところウィーンのアート史博物館よりは劣るが、フランクフルトの市立美術館よりは数等上である。星四つと三つとの中間の感じであるが、上野の国立博物館を辛うじて四つに入ると評価したことから考えて、ここも上野と同じ程度とお考え願いたい。

博物館を出るともう夕方の気分が漂っている。パリでは感じなかったが、この街は最初に着いたときから、何となくうらぶれた感じがしている街だと思っていた。駅からホテルへ案内されたときにEC本部があって、成る程大きな建物だとは思ったが、それ以上は何も感じなかった。どうも我ながら少し変だとは思っていたが、今博物館を出たときに始めてあれだと思いついたことがある。実は私は中年まで四国の一地方都市に住んでいたのだから、その地方在住中の経験として、年一回位は東京へ出て用事をしたり、観光したりで一週間位滞在していた。そして帰ったとき、その街の駅へ降り立つと、今迄相当な繁華街だと思っていたその駅前がすごくきびかれた街に見えて驚くのである。そして一週間位経つと元通りになるので、これは一回限りではなく、何回繰り返しても起っていた。その現象が今ブリュッセルへ来て起

ったのである。つまり、花の都パリで三日間を過ごして、ブリュッセルへ来たので、ブリュッセルがひどくさびれた街に見えたのである。そう言えばマドリッドからリスボンへ行ったときも、リスボンがうらさびれた街に見えたのも同じ現象だったのである。ただ、その時は今度はひどくさびれたので、気が付かなかっただけである。そんなことを考えながらホテルへ帰って来ると、ホテルがまたひどい淋びれようである。もう夕方であるのに我々2人以上に人の泊っている気配がない。ウェーターもパートタイマーらしく、チェックインのときと今度帰ったときと人が変っている。その上ホテルの建物がフランクフルトのモノポールホテルと同じで、建てたときは相当な設備だったのであるが、築後50年位経っているらしく、室にしても大きくて、調度も立派なものを使っているわりには豪華な感じがしない。廊下にしても2米半はあるゆったりした天井の高いものであるが、それが却って無人の感じを誇張して不気味な気さえる。こんなところで2晩も泊まるのはかなわない、と連れと相談して明日逃げ出すことにした。そうと決まれば今晩は派手にやろうと、ちょうど広場の向かい側にあるインターコンチネンタルホテルの3階にある大レストランで夕食をすることにした。もうこの時期になると覚えてきたソムリエという、ワイン専門のウェーターを呼んでメニューを見て blanc と rouge の vin を注文した。もちろんフランス語の名前は解りはしないが、値段のところを見て余り高くない奴を指で示して注文する要領も覚えて来た。窓際の一角に7、8人のバンドがムード音楽を演奏しており、このレストランだけは華やいだ空気が漲っている。そこで、充ち足りる迄飲食してベルギーの一夜を過ごした。翌日ゆっくり眼を醒まし、出たとこ勝負でキップの買った列車に乗ることにして駅へ出たが、直ぐ次に出る11時43分発のパリ行特急がとれた。待つこともなく列車に乗り込んだところ、キップがとれる筈だ、6人乗りコンパートに我々2人きりという状態で、外の室も似たりよったりだった。驚いたことに、このガラガラの列車の中にツアーでない日本人の旅行者が我々の外に2組居て、一人は40近い男子だったが、もう1組の方は若い女の子で、英語も十分話せないのに2人でヨーロッパを気の向くままに廻っているとのことであった。我々にはできない芸当である。成るほど男女平等を称える婦人が多くなったのも当然だと考えさせられた。

やがて、14時8分パリ北駅へ着いて、雑闇にもまれてホット落付いた気になった。今晩はゆっくり休んで、明日から残り2日半を有効に過ごす計画でも立てよう。

## パ リ 2

昨夜の計画に基き、印象派美術館を観るべく、地下鉄でコンコルド広場まで乗り、チュイルリー公園の隅っこにある同美術館に行きかかったが、どうも様子がおかしい。パリの美術館は大抵何処でも画学生が三々五々群をなしているのだが、誰もいない入口が見えるところまで行ってやはり今日は休館だとわかった。それではと、もう一方の隅にあるオランジュリ美術館を観ようとしたら、この方は遠くから見てもわかる板囲いがしてあって、只今改装中とある。こんなときに悪あがきをすると禄なことにはならないので、予定を変更して今日はシテ島周辺のセーヌ河風景とオペラ座廻り迄を乗り物に乗らず歩き廻ることにした。まずチュイルリー公園のマロニエの並木路をルーブルの方へぶらぶら歩く。マロニエ、マロニエといって皆騒ぐけれど私はどうゆうものかマロニエが好きになれない。あの八つ手のような大きな葉はどれも親しみが持てない。ジャンゼリゼーに植っているから好みとか親しみとは別にパリの象徴のようになったのであろう。ちょうど銀座の柳のように。その並木路の終る広場にカルーセルの凱旋門がある。その右側を通り抜けると、もうルーブル宮のコの字型の中へ入っていて、コの字型の両方の翼を貫くように通っている道路を右へ曲って、セーヌ河へ出て、その儘カルーセル橋を渡った。これを真直く行けばモンパルナスへ出る筈であるが、その余裕はないので、橋を渡ったところで左へ曲ってセーヌの左岸を上流へ歩くことにした。暫く行くとシテ島が見えて来た。ちょうど大阪の中之島に似ている。大阪という街はおよそ情緒のない街だが、不思議なことに中之島界隈だけは魅力のある風景が残っていて、私は好きだったが、先日、安宅コレクションを展示するために建てた大阪市立陶磁美術館を観に行くと、美術館の建物は結構附近とマッチしているが、惜しいことに地盤沈下のために中之島の周囲全体に防潮堤をめぐらせて、水辺には2メートル以上のコンクリート塀が立っているのを見て、驚くとともにガッカリしたが、パリはセーヌ河口から150kmも上流にあるから、その心配はなく、ノートル・ダム寺院も13世紀中ばに建てられたままの姿で平然と建っている。中へ入ると教会はどこでも同じだが、眼が慣れるまでは足元もわからないから、その暗い中で壁面に浮かび上るステンドグラスのきらめきは、今見ても眼が醒める程綺麗だから、中世の信仰深い人が見たら、全くこの世ながらの天国と思えたであろう。殊にこのノートル・ダムの北廊のバラの窓といわれる大円形のバラの花が満開になったようなステンドグラスは他で見られない華

麗さを誇っている。私はステンドグラスはキリスト教美術の傑作だと思っているが、このバラ窓は中でも白眉とっていいだろう。ステンドグラスを鑑賞しているうちに眼が慣れて来て、床が見えるようになると、ここも著名人の柩が埋葬された個所がそこ・ここにある。これは日本人の理解できないところで、日本人の感情では人の土足にかけられることは、死に値する程の侮辱を受けることになり、殊に死者を土足にかけるとは、たとえ如何な仇敵といえどもしないところである。それがヨーロッパへ来ると何処の教会へ行っても床に著名人の柩を葬って、その表示をしてある。「ところ変れば品変る」という諺の顕著な実例と言えるだろう。

さて、ノートル・ダムをでて、ぐるっと一廻りして見たが、ここに限らずヨーロッパの寺院は正面は厳めしく飾り立てであるが、裏に廻ると楽屋裏を見るようで、建築の補強材のような大きな鉄骨が丸出しになっていて、余り体裁のいいものではない。これも「処かわれば…」の口であろう。それからセーヌ右岸へ廻り、有名な古本屋の露店のあたりを見ようと思ったが、今はシーズンオフらしく、殆んど店は出てなく、ほんの1、2軒が店を張っているだけであった。もう屋も近くなって来た。食べ物屋の様子はわからないので、少し遠いが先日招待されて行った「さくら」へ歩くことにした。ルーブルとパレ・ロワイアルとあるからやはり王宮の一部だったらしい古い建物との間を歩いてオペラ座通りへ出る。パリで日本の街と一番違うところはけばけばしい広告が一切無いことである。色の付いたものは建物にもない。オペラ座通りといえばシャンゼリゼーに次ぐ目抜き通りであるが広告らしいものは見えない。三越の支店がオペラ座近くにあるのだが、日本ではどこの支店へ行ってもすぐ眼に付く赤い丸越の看板がここでは黒になっている。先日行ったとき、黒はどうもお葬式のように気分が悪いから、何とか工夫はないかと聞いたところ、色は一切使わないのでどうにもならない。外にも色々制限があってなかなか面倒である。黒は勿論好むところではないが、看板がなくては全く目じるしがなくなってしまうので、己むなく許される最大限で工夫したところがこれです、とのことであった。香港、シンガポールのケバケバしさは論外としても、日本でも秋葉原などは、なんとかならないかとは思いますが、パリ程取締らなくてもいいように思う。しかし、国によってやり方の違うのは大いに結構である。そんなことを思いながら「さくら」へ行って鉄火巻を食べる。私は食べることに余り趣味はなくて、ロンドンなどではホテルの近所のスナックで、100円のコーヒー

と150円のサンドイッチで済ましたことも2、3回あるくらいだから、普通の日は何でもいいのだが、今日のように時間に余裕があり、心持もゆったりしているときは異国ですしを食べるのも悪くない。さて、今日の午後はホテルの室で、原稿でも書いて、後はゆっくり休むことにしよう。

明日は印象派美術館を見るとき、いよいよこの旅の最後の一日となった<sup>あきって</sup>明後日はどのように過そうかと案内書を見ていると、エッフェル塔の対岸にあるシャイヨウ宮に博物館が7つも集中していることがわかった。ちょうどロンドンのローヤル・アルバート・ホール界隈のようである。その7つとは次のとおりである。

- 海洋博物館 (Musée de la Marine)
- 人類博物館 (Musée de l'Homme)
- フランス史蹟博物館 (Musée des Monuments Français)
- 民族博物館 (Musée des arts et Traditions populaires)
- 映画博物館 (Cinematheque)
- 国立民族劇場 (TNP)
- 水族館 (Aquarium)

これを一日でいくつ見られるかわからないが、とにかくあきってはシャイヨウ宮で一日を過ごすことにして今日は早く寝る。

8月22日水曜日9時過ぎにホテルを出て地下鉄に乗る。パリもロンドンも地下鉄は、乗客サービスは自動化されて、乗降に際し駅員の姿は見ることがない。これから考えると日本の地下鉄は随分人員の無駄があるように見えるが、あれは何かかならないものだろうか。それとも一つ、ロンドンでは気が付かなかったがパリでは大分一人歩きして、向うの人が乗降しない口からも出入りするようになったせいでは気が付いたのだが、日本では止まるとホーム側のドアが一斉に開くがパリでは中央に掛け金があって、それを外さないとドアが開かないようになっている。一度それを知らなくて、日本の積りで開くまで待っていると開かないでそのまま発車してしまって、乗り越しをしてしまった。そのときは幸い行き先が次の駅と下りる予定の駅との中間だったので、そのまま次の駅で下りて逆の方向に歩いて目的を達したが、この方法も暖房なんかしているときは、日本式は止まると全部のドアが開くので寒くて仕方がないが、パリ式だと乗降しない口は開かないから乗り心地はいいだろう。これはあるいは寒さの違いでそうなったのかもしれない。さて、いよいよ印象派美術館に入館であるが、私が観たこの建物

は今は印象派美術館ではなくなっている。取り壊されたか改装されたかして、先の大改装計画で述べたとおり印象派美術館は川向うのオルセーに移っているが、とにかく私はこの眼で観たとおりを述べなければならない。

## 20. 印象派美術館

いまこの眼で見る印象派美術館の印象は小学校の建物を一棟持って来て据えた、という感じである。ルーブル博物館が王宮の建物をその儘使っているのに対し、ルーブル博物館附属印象派美術館の建物は廃校になった小学校の一部をその儘使っているような恰好である。外観だけでなく内部も一方の窓際に廊下がずうっと入口から奥の端迄通っており、教室くらいに仕切られた室が並んでいるところまでそっくりである。建物はこのとおやお粗末といえお粗末であるが、中味は一つ一つが珠玉のように輝やいている。ここにはルーブルに収容しきれなかった印象派の作品が、マネ、モネから始めて時代順に、所狭しと展示されている。その有様はこの建物にふさわしく、小学校の作品展示会のように、壁面にすき間もなく掲げられている。まさに壮観である。いかに作品数が多いか、この展示を見ただけでわかる。室数は20ぐらいあって大体一人一室が使われている。モネなどは一室に入りきらないで連作「ルーアン大聖堂」が5面、廊下の壁面にずらりと並んでいたのは印象的であった。モネの睡蓮は有名で作品も多く、構図も多種多様であるが、「ルーアン大聖堂」のように大きさも、構図も寸分違わない画面を、色の変化だけで5面も季節感、天候の様子などを全く変えて表現した作品は余り類例がないように思う。それから、ゴッホも私の好きな画家の一人であるが、今迄に日本の画集などで紹介されている絵は向日葵や麦畑のように黄色の勝ったギラギラしたものが多くて、その点息苦しい感じがしていたが、今度ここへ来てゴッホにも、何とも言えない柔かい空の色や、家にもピンクやグレーを使って、心なごむ画面が相当あることを知って、ゴッホに益々親しみを覚えるとともに、ホッとした気分にもなった。

それにしてもルーブルで溢れ、ここで溢れ、そして今度移転したオルセーではどうだろうか。それから近代美術館、ピカソ美術館と考えて見ると、フランスが芸術の国であることをつくづくと思い知らされるようである。エルミタージュといい、メトロポリタンといい、いかに絵画のコレクションの豊富を誇っても、所詮パリの国立美術館群に比べたら色褪せた感じは否めない。そして今度のフランスの博物館群研究所の話を

聞いて、私が数年前から提唱している「博物館社会学」が現実の問題として動き出していることを痛切に感じる。さて終りに印象派美術館の評価であるが、現在なくなっているものを評価しても仕方がないではないかという議論もなり立つ、しかしこの文章の文脈からいっても一応区切りとして付けて置いた方がいいと思うので、評価しておく、建物は小さくて、フランクフルトの市立美術館よりも小さいが、作品の豊富さと内容の重要性を加味して星四つを付けるべきだと思う。

これで印象派美術館を終って、その日は時間が少し早かったのであるが、この旅行中持ち歩いている原稿の推敲をしようとホテルへ帰ることにした。一ヶ月に亘る旅行中、飲み歩くこともなく、同行の愛酒家との夜の付き合いは一切断って室に閉じこもって退屈しなかったのはこの原稿を持ち廻ったお蔭であった。明日はいよいよ最後の一日をシャイヨー宮で過ごすことになる。